

いたが、果して日本産と同じかどうか疑問に思っていた。1967年ブータンで採集した資料を日本産と比較した結果、花梗がやや短かく葉は多少長味があり、萼片は橢円形で中央部で最も幅広く、花弁は少し短かく、雄蕊は雌蕊より短かく薬もやや短かいなどの少差があるがやはり同一種と考えられる。なお現地で固定した標本を九州大学理学部芳賀憲教授と渡辺階氏に調べていただいたところ、染色体および核型もシロバナエソレイソウと一致することが判明した。ここに両氏のご協力に対し厚くお礼を申し上げる。

34) フトボノヌカボタデとシマヒメタデ 両型ともインドやマレイシアに広く分布することが分った。最も早い学名は *Polygonum tenellum* Blume (1825) で瘦果は長さ 1.6-1.9 mm あり、フトボノヌカボタデとほぼ一致する。*Pol. micranthum* Meisner (1865) は果が 1.2-1.5 mm でシマヒメタデに符合するが、変種名としては var. *Kawagoeana* (Makino) を用いてよい。

35) イチゲイチヤクソウ 欧亜大陸北部には広く分布しているが、南側ではカシミル、天山山脈、雲南、台湾と飛び飛びに知られており、東部ヒマラヤからは初めての報告である。

36), 37) *Lonicera adenophora* Franch., *L. saccata* Rehder 両種とも中国西部又は中部から知られているだけであったが、共にブータンに産することが明らかになつた。

口桜井 元: やぶれがさ草木抄 A5 版, pp. 306, 口絵 pp. 16. 東京, 誠文堂新光社発行 (昭和 44. 11) ¥1.500. フクジュソウ, ヤブレガサ, クリスマスローズ等々約 50 の草木をえらんで、古書をさぐり、短歌をあげ、栽培史をからませながら、書かれた隨筆集。月並のそれと違つて、多年の栽培と観察の間にえられた事実や考察などがさりげなく書かれていて、教えられるところも多い。たとえばキキョウの古名アリノヒキは、果実が熟して上方の孔から蟻の子が噴き出すように黒い細かい種子が出来るから、もとはアリノコフキではないか、コは古の文字にしたのが、写本の際に比と草書で誤り写されたらしいという提案なども興味がある。とにかく楽しくよめる本である。一二気になったのは、学名に古いシノニムまであげることの無意味。それからあとがきによれば、以前に他誌に書かれたものようだが、そなならば各章末に雑誌名などを年月と共に書いてほしいものである。

(前川文夫)

○ラクダの針 (久内清孝・小林義雄) Kiyotaka HISUCHI & Yosio KOBA-YASI: The camel's thorn

小林は昨年夏にカイロ郊外のギゼーから、ナイルを少し溯ったサッカーラに遊んだ。夏の炎天下に訪れる客も殆どなく悠々と古代の空気に触れたわけである。サッカーラ

にはエジプト最古の遺構である階段状のピラミッドがあり、石をレンガ状に細かく切り、これを積重ねたものであるが、技術の進まぬ時代のこととて、崩解せぬように段がつけられてある。近附いて見ると地上 10 m 位の高さの一ヶ處より大きな丸太が水平に突出している。恐らく石塊の支えとしたものであろう。これこそ正しく 4,800 年昔の人間の手になった木材である。その一片でもと思ったが、山をなす石塊が今にも転げ落ちる気配がして思い止まった。次にこの附近の神殿を取巻く土壠が目についた。これはナイル河畔の粘土に、附近のイネ科植物の茎をスサ(苟)として混ぜてレンガ状に固め、これを積重ねたもので満洲で見た土煉瓦と同様なものである。その一片を取ると植物の破片や巻貝の殻が目につく。これも数千年昔の人間の手に触れたものであることは確である。

ギゼーのスフィンクスやピラミッドの周囲で目に触れた植物は 3 種ある。ギヨリュウの仲間 (*Tamarix* sp.), イネ科の *Aristida pungens* Desf. およびここに記す「ラクダの針」である。刺植物に深い関心のある私の目を特に惹いたこの植物は高さ数 10 cm の小灌木状で全株が刺の塊のように見える。細い茎から長さ 3~5 cm ある刺状枝を直出し、全体が淡緑色で細かい毛を布き、刺の先のみが淡褐色に木化している。葉は茎に疎生し披針形で厚ぼったく、白い軟毛を布く。茎の先の方の刺状枝に数個ずつの紅紫色の小蝶形花をつける。花と同時に漿果も数多く見られたが、細長で輪を画き、

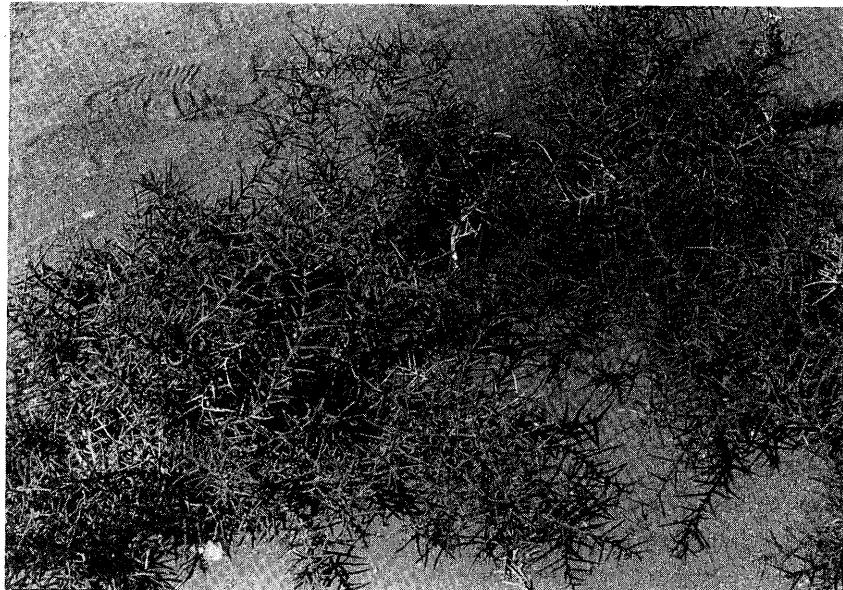


図 1. ラクダの針。エジプトのスフィンクスの傍らにて写す。

莢は種子形にくびれて居り、黄褐色を帶びている。全株はその姿に似ず比較的軟質で、ラクダの食料になると案内人が話していた。

さてこの植物の解説は久内がバトンを受継ぐこととする。

この植物は Camel's thorn という通俗名で知られているもの一つで、*Alhagi* 属に属し、かつて、「ラクダの針」と訳した人もあった。近東にあるもので、2-3 の種類があり、そのうち *A. camelorum* と *A. maurorum* がよく似ている。さしあたりこれを E. Boissier の *Flora Orientalis* (1872) で見たところ、両者の相違は、針の長短、太さ、萼歯の形状がものをいう近縁のもので、小林が採集したものは *Alhagi maurorum* に当る。そうして、この学名のものに、松村任三氏は本草字典 (1892) で、すでに、マンナという和名も用いているが、そのほかにモロッコマメと呼んだ人もある。

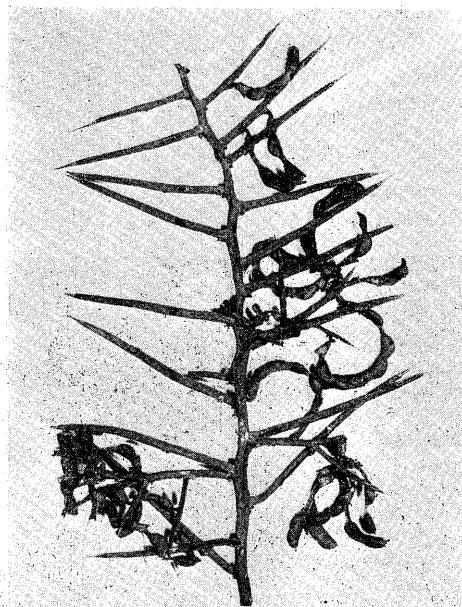


図2. 小林採集のラクダの針。A fragmentary twig of Camel's thorn.

英名 Camel's thorn は通俗名だから、それがどれに当るか調べる必要があつてないようなものだが、A. L. Moldenke は *Plants of Bible* (1952) で *A. camelorum* var. *turcorum* Boiss. 説をとっているけれども、J. C. Willis は *Flowering Plants & ferns* (1925) で *A. maurorum* としているから、これに従つておく。すなわち本品は *A. maurorum* Medic., マンナ、またはラクダノハリ、英語名 Camel's thorn として差支ないことになる。

これらに関連した話題にふれて見よう。Camel's thorn の名で呼び、専ら焚香料資源としての立場から、これを扱うとき Moldenke は *Ecclesiasticus* 24: 15 から次の句を引用している。“I gave

a sweet smell like cinnamon and aspalathus, and I yielded a pleasant odour like the best myrrh, as galbanum, and onyx, and sweet storax, and as the fume of frankincense in the tabanacle.” そうして、この句の中にある aspalathus に因縁をつけている。*Ecclesiasticus* は日本聖公会文書局が訳出した *Apocrypha* すなわち旧約聖書外典中の一書で、ベンニシラの知恵、シラスの子イエスの知恵などと

訳されているが、一般には集会の書という名で知られているもので、現行聖書中の *Ecclesiasticus*, すなわち伝道の書ではないこというまでもない。さて、ここの *aspalathus* だがこれはリンネの *Genera plantarum* の属名 *Aspalathus* とは全々関係はない。また上述の日本聖公会の訳本では、わかつてか、わからないからか、「アスペラトの木」と訳してある。集会の書中には、たゞ一回でてくる字だというが、これに判決を下すことができるかどうか?

次は出エジプト記の *manna* と関係づける考え方であつて、これには、いろいろなものが登場してきて甲論乙駁の状態である。本誌5巻(1928)8号に写真の出ている *Lecanora esculenta* Eversm., *L. affiniis* Eversm. のような地衣の種類だとか、アラムシの分泌する honey-dew つまり、我国でも知られている初夏に広葉の上に見られる甘露のようなもので *Coccus manniparus* の分泌物だとか、または、ある季節に大移動するウズラ類の鳥群の排泄物だとかいう人もあったし、*A. maurorum* たの、*Tamarix mannifera* Bunge, *Fraxinus ornus* L. などもマンナの原料として数えられている。そのなかで、*F. ornus* などは日本薬局方第4版にも医薬としたことがあるが、聖書のものと同一かどうかはわからない。そこで *A. maurorum* がなぜここに引合いに出されたかというと、この根に甘味物質があるとかで、C. W. Weimer: die Pflanzenstoffe (1929) にも *Mannaklee* という名で *A. camelorum*, *Kameldorn* と共に理由があるらしいことを Jour. Amer. Chem. Soc. 1918 を引用摘記しているが、どの程度正確に同定された原料のものかわからないから、一応承知しておくだけのことである。由来古典の植物を判定することは容易な芸当ではない。

いろいろな横道に這入つて見たが我々はこの植物がなんであるか、Camel's thorn はなにを指すのか、それでよいと思う。なを国立科学博物館には、小林採品の外、かつて久保田礼治氏が採集寄贈された *A. maurorum* と、外国との交換で送られてきた *A. camelorum* とが蔵されている。

#### ○高等植物分布資料 (68) Materials for the distribution of vascular plants in Japan (68)

○ナガバコウラボシ *Grammitis nipponica* Tagawa et K. Iwatsuki 1969年6月8日、三重県鈴鹿郡加太不動滝の溪側のエノキ、ツバキ等の疎林下の岩上(基岩は古生層硬砂岩)、標高約250mのところで採集した。従来の分布は、佐賀、熊本、高知、和歌山、静岡の諸県と、屋久島、八丈島、御蔵島、硫黄島等の島嶼で、県内で未だ記録がないので稀品と考え報告する。

胞子嚢群は主脈に対して斜めに着き、若い頃は長楕円形黄色を呈しているが、生育が進むに従い暗緑色に変わり、のち円形に近づき褐色を帯びている。附図左端の先端の破損した羽片に胞子のう堆が見られる。着生地は傾斜が非常に急峻で、ハイゴケ、